

今週のメニュー

■トピックス

◇日化協主催の「新しい理科カリキュラムに対応した教授法」に参加
—宮城県名取で初めての「こども化学実験ショー」開催—

■随想

◇古代ヤマトの遠景（69）—【磐井の乱（2）】—

信越化学工業（株） 木下 清隆

■編集後記

■トピックス

◇日化協主催の「新しい理科カリキュラムに対応した教授法」に参加
—宮城県名取で初めての「こども化学実験ショー」開催—

一般社団法人日本化学工業協会では、化学の啓発と化学産業の社会への貢献の理解促進を目的に、小中学生向けの「夏休み化学実験ショー」や中高生向けの「化学グランプリ」などを通して、将来を担う若い世代の“化学のチカラ”を高めるための活動を行っています。10月20日、21日、これまで東京でしか開催されてこなかった「こども化学実験ショー」を宮城県名取市の“イオンモール名取”を会場として開催されたのに合わせ、小中高の先生方を対象とした「新しい理科カリキュラムに対応した教授法」と題するセミナーが開かれました。



別会場で開催された
「こども化学実験ショー」の様子

プログラムのひとつに「身の回りのプラスチックをもっとよく知ろう！」と題した演題が組み込まれ、プラスチック処理促進協会とVECが共同で、講師を引き受けました。「プラスチック」のカリキュラムは、今年から中学校理科に導入された題材です。講義では、プラスチックの基礎知識に関する解説とプラスチックの特性を実感してもらうため、先生方には、実際に簡単な実験を行ってもらいました。



セミナー風景

ご参加いただいた先生方の半分は、高校の先生で、その多くは若い先生でした。講義中はもちろん実験中も、実験の内容を熱心に観察しながら、気づいたところを“赤ペン”で配布資料に書き止めるなど、しっかり、教える側の立場として講義を聴き入っている様子が伺えました。教育現場に携わる先生方の意欲的で熱心な姿がこちらにも伝わってきて、快い感動を覚えました。そんなことで、われわれの担当時間の70分はあっという間に過ぎ、予定の時間を20分近くもオーバーしてのセミナー

閉幕となりました。セミナーが終わったあとには、先生方から、「プラスチック産業界の取り組みを知り大変参考になりました。」とか「理科の授業でどう実験していいかわからなかったので、大変助かりました。」とのお礼のことばをいただき、疲れもふっと吹き飛んだ感じでした。

セミナーは、実験を中心とした内容であったことから参加人数を50名と制限せざるを得ず、多くの先生方のご希望に添えなかったかもしれません。機会があれば、プラスチックを知ってもらうためにも、このような活動を続けていけたらと思います。



班に分かれての実験の様子

■ 随想

◇古代ヤマトの遠景（69）－【磐井の乱（2）】－

信越化学工業（株） 木下 清隆

<磐井が討たれた時期>

前回、磐井の乱の背景となるような問題を探るため、半島諸国と倭国の動向を、約半世紀分まとめてみた。それから分かることは以下のようなことである。

継体二十一年（五二七）の磐井の乱が、南加羅と喙己吞とくことんを奪い返すために起きた事件とするなら、これはかなり無理筋の話といえる。理由としては以下のような点が挙げられる。

- ① 喙己吞は新羅の南部国境沿いに在ったと考えられている小さな国であり、五二四年に新羅に討たれたのは確かなようであるが、その小国奪還のための派兵は考えられない。
- ② 南加羅の金官国が新羅へ投降したのは五三二年のことであり、五二七年当時は未だ健在である。従って、①と合わせて考えれば、派兵の大義名分は全くない。
- ③ 更に、新生新羅は誕生して間もない頃であり、国家としては先輩格に当る百済との関係は良好であった。従って、磐井に賄賂を贈らなければならないほど、半島内で追い詰められていた状況には無かった。

以上のような理由から、継体二十一年の近江毛野臣が六万もの兵を率いて、半島へ渡ろうとしていたこともあり得ない話になり、磐井の乱も無かったということになる。

ところが磐井の討たれたことだけは史実だとするなら、如何なる理由で何時、討たれたのかが新たな問題として出てくる。これまで多くの説が出されているのが、磐井の朝廷に対する反乱説である。磐井を、筑紫地方の倭王家に対立する一大勢力とみなせば、反旗を翻す理由は何かと想定できる。しかし、これまでに検討してきたような磐井像が史実に近いとするなら、彼が反乱を起こす理由などはない。その彼が史実として討たれたとするなら、理由の一つしかないことになる。即ち、半島への派兵を断わったことが挙げられよう。この理由で彼が討たれたとするなら、それはそれなりに理由があることになる。では、その時期はであるが、これについては次の二案が考えられる。即ち、

- A) 新羅が南方国境の勢力拡大を図った五二四年から、金官国投降の五三二年までの間と、
 B) それ以降の何れかの時期、
 の二つである。ではA、Bのいずれに可能性があるのだろうか。

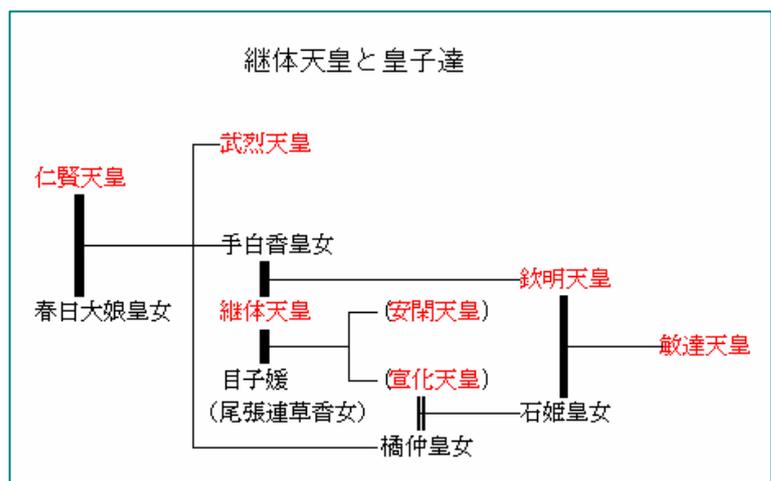
A案は磐井に対する半島への派兵要請を磐井が断ったから、懲罰的な意味でこれを討つたと解釈できる。しかし、当時の状況として、磐井を討つことのできるような兵力があるのなら、大伴氏でも物部氏でも半島へ渡ればよいことであって、内輪揉めをしている場合ではないと考えることはできる。さらにこの場合は、継体天皇存命中の事件の可能性が高くなるが、磐井討伐に天皇が了承することは筑紫制圧に苦勞してきた両者の関係からみて難しいという問題が出てくる。このように考えるとA案は無理だということになり、B案が残る。

このB案の場合は、「金官国を倭国として失った原因は、お前だ」と磐井を糾弾することが出来る点で有利である。このように考えるとB案が有力となってくる。更にこの事件は、両者の関係から見て継体天皇の没後であるとの条件が課せられるが、その条件を当てはめると、磐井討伐事件は、金官国投降の翌年辺りが有力となってくる。即ち、五三三年頃である。翌年としたのは時間が経てば磐井を糾弾するインパクトが弱くなるからである。

<継体崩年>

磐井制圧に継体天皇は係わっていなかった、更に磐井の討伐は五三三年頃だとの前提に立てば、天皇の崩年に関する三つの説の一つは落すことができる。五三四年説、即ち継体二十八年崩御説は有り得ないことになる。残りの五二七年と五三一年説についてはどちらも可能性があるが、古事記に記されている五二七年説の信憑性には疑問がある。この年に無くなった継体天皇の年齢を四十三歳と古事記は明記しているからである。これでは天皇即位時の年齢が二十歳前後となり、若すぎて即位当時、既に大勢力のリーダーとして君臨していたとする、これまでの推論と整合性が取れなくなるからである。従って、五三一年説が残ることになる。この説については、書紀の撰述者が百濟本記に従って、五三一年、即ち継体二十五年を採ったと注記している。おそらく彼は、倭国の歴史として伝承されている内容の誤りに気付いており、これを修正するのに、百濟本記をその証拠資料に使った可能性はある。

では書紀の編者は、恐らくこれまで継体二十八年とされていたこの天皇の没年を、なぜ百濟本記を引っ張り出してまで、二十五年に上げたのだろうか。それは磐井の乱と称されている事件が、史実として継体朝以降に起きたことを、幾分かは公にできる状況になっていたことが想定される。世の多くの人々はその事実を知っていたが、公然とは口に出来ない何かがあったということである。



ではなぜ記紀共に継体朝の乱として取り扱ったのだろうか。それは、この事件を惹き起こした当時の天皇は誰だったのか、という問題と深く関わっている。継体天皇の後は安閑天皇である。安閑天皇が磐井討伐を命じたのなら、そのように記せばよい。ところが安閑紀は屯倉に関する記事で埋められており、微塵も磐井の影を感じさせない内容となっている。次の宣化天皇の場合も同様である。このように考えると残るのは欽明天皇となる。

話として、継体天皇の後、即位したのは欽明天皇であり、この即位直後に磐井討伐は行われた。しかし、その事実は隠され、継体朝の事件として処理されたと考えたと話の辻褄は合ってくる。この継体後の欽明即位説については、『上宮聖徳法王帝説』にそのことが間接的に記されており、記紀の記述との違いから、これまでに多くの論議がなされてきた経緯がある。

上宮聖徳法王帝説の中に「志^{しきしま}帰嶋天皇、治天下四十一年。」とあり、更に割注として、「辛卯年四月崩。陵檜前坂合岡也」が付けられている。欽明天皇は磯城嶋に宮を置いていたことから、志^{しきしま}帰嶋天皇と呼ばれたらしいが、その治世が四十一年だったことがこれからわかる。ところが書紀に記されている欽明天皇の治世は三十二年となっており、九年間の差異がある。欽明天皇の没年については書紀には記載がないが、次の敏達天皇の即位元年については、壬^{みずのえたつ}辰と明記されていることから、その崩御年は前年の辛卯^{みずのとう}であることがわかる。これは割注の「辛卯年四月崩」と符合する。従って、欽明天皇の没年は五七一年ということになる。

これを基点にして逆算すると欽明元年は五三二年となり、継体天皇が崩じた翌年のことになる。わが国においては、先帝の崩御後に新帝は即位するが、新帝の元年は翌年とする制度が一般的に採られている。このことから、このような想定が可能になると云うことである。

なお、新帝の元年と共に元号が替わる場合は、これを「踰^{ゆねん}年改元」といい、このような制度を「踰年称元法」と称している。このことは新帝の即位後も、先帝崩年時の元号が年末までは使用されることを意味する。

このように欽明天皇の即位が五三一年、その元年が五三二年だとするなら、継体後の安閑・宣化両天皇の即位は無かったことになる。

(つづく)

「古代ヤマトの遠景」：[バックナンバー](#)

■ 編集後記

2週間前、岡山の駅前を歩いていると棘のついたリュックサックが目に入りました。形状はとてもユニークでカラフル、表は一見して塩ビレザー（コーティング）とわかるものでした。早速、「とげ」と「リュック」でネット検索すると、「とげリュック」あるいは「とげとげリュック」がわんさかと出てきました。案の定、表は塩ビコーティングとか塩ビレザーのものが多く、塩ビの滑らかさ、彩色の良さを生かした製品だと思いました。しかし、製造は中国で、ノーブランド品、すべて輸入のようです。こういう製品は誰がどのように仕掛けているのでしょうか。謎です。（ももっち改め、ももった）

■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)
- [メールマガジン解除](#)



◆編集責任者 事務局長 東 幸次

■東京都中央区新川 1-4-1

■TEL 03-3297-5601

■FAX 03-3297-5783

■URL <http://www.vec.gr.jp>

■E-MAIL info@vec.gr.jp
